

【研究テーマ】

『物事をやりきり、互いに認め合い、高め合う仲間づくり』

湯梨浜町立北浜中学校

スーパーバイザー：高知大学 教育学部 鹿嶋真弓准教授

1 はじめに

本校では、生徒との信頼関係を築き、「わかる」授業、基礎基本の定着を図る取り組みを進め、多くの生徒が落ち着いた学校生活を送り、意欲的に学習に取り組むようになってきた。昨年度の「少人数学級を活かす学びと指導の創造事業アンケート」でも、「授業がわかった・できた」という問いに 8 割以上の生徒が肯定的な回答をしている。

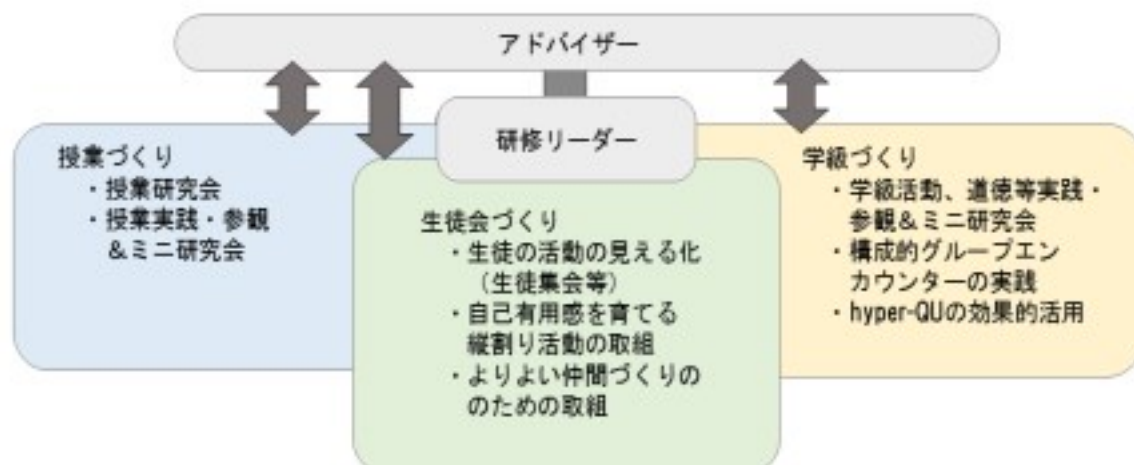
また、平成 24 年度より、「思考力・判断力・表現力をはぐくむ授業づくり」を研究主題に言語活動の充実を図るために、グループ活動、話し合い活動等を学習活動の中に位置づけ取り組みを進めてきた。この取り組みの過程で、「書くこと」の重要性に対する認識が深まり、「書くこと」に焦点をあてた言語活動に全教科・全領域で取り組んだ。

同時に、「わかりやすい授業」を意識し、誰もが参加しやすい授業を行うことは、生徒全体の基礎基本の定着や学習意欲の高揚、言語活動を充実させていくうえで重要だと考え、「ユニバーサルデザイン」の授業（通常学級における特別支援教育の視点を取り入れた授業）についての研修を行い、全教科・全領域で共通実践を進めてきた。しかし、昨年度の反省より、「指示されたことはできるが、主体的な動きはできない」「小集団では意見を出せるが全体の場では意見を出しにくい」「わかりやすく説明したり、全体の場で自分の考えを伝えるなどのつながり合う学習が弱い」という課題が出てきた。

この課題を改善していくために、ユニバーサルデザイン化（以下UD化）をすすめるにあたって特に重要な 3 点、①教室環境のUD化 ②人的環境のUD化 ③授業のUD化 のなかの特に本年度は、②人的環境のUD化、すなわち、「クラスの間環境」を豊かにして、誰もが安心して学び合える仲間である「学級集団」を作り上げることを重要視して取り組むこととした。それと同時に、③の「誰もがわかりやすい授業」を行うことで生徒の学びが向上していく。この 3 つがそれぞれ連携し合っていることが必須なのである。つまり、教師側が、「わかりやすい授業」を意識して行うことと同時に、生徒同士が意見を出しやすくする「人間関係作り」が必要であると考えた。

2 研究のねらい

- hyper-QU を活用して人との関わりの基本となる「学級づくり」
- 3 年生がリーダーとなり、後輩を引っ張って活動する「生徒会づくり」
- ペア学習、グループ学習等を活用し、学び合うことで考えをさらに深める「授業づくり」という 3 本の柱の研究組織で取り組みを進めていきたい。



3 研究内容

①共通実践

<北溟授業5>

生徒に「分かる・できる喜び」「考える楽しさ」を実感させるために・・・

- ①めあて（目標）を示す
- ②自分で考え表現する時間を確保する
- ③目標の達成度を確認する
- ④学習内容をまとめる
- ⑤授業の振り返りをする

(1) 授業の流れ

- 1, 目標の確認
- 2, 「山場」を真ん中に
- 3, 授業の振り返り（授業チェック）

(2) 黒板等の活用

ほ（本時の目標） く（クリアに） め（目に見える流れ） い（色で強調）

(3) グループ学習を取り入れた授業

- 【学びの作法】「あ」 アドバイスを素直に受け入れる
「お」 お互いの話を聞き合う
「ぐ」 グループの仲間を思いやる
「も」 もっとくわしく納得するまで説明

(4) 育てたい力

- 1年生（やりきる）→課題に取り組む力、話を聞く力
例：「お」 互いの話を聞き合う
- 2年生（互いを認め合う）→意見を出し合う力、自他の意見を比べる力
例：「あ」 どばいすを素直に受け入れる 「ぐ」 ループの仲間を思いやる
- 3年生（高め合う）→納得するまで説明する力
例：「も」 っとくわしく納得するまで説明する

②校内研究会

○4月～5月

- ・構成的グループエンカウンターの実施
- ・学級のルール、目標づくり
- ・ルールの徹底

<hyper-QUの実施>

- ・hyper-QUは5月20日に実施
- ・数字を転載し、ネガティブチェック
- ・6/14～17に「アセスメント・対応策シート（別紙1）」を記入し具体策を検討

○第1回 6月20日（月）第1回hyper-QUの結果を活用して

スーパーバイザー鹿嶋真弓先生を招聘

- ・6月20日：高知大学 鹿嶋真弓准教授の指導
2限 全クラス授業を鹿嶋先生が参観
3限～5限 hyper-QUを活用した学級経営について担任との懇談
研究協議 スーパーバイザー鹿嶋先生の講義（80分）

○第2回 7月1日(金) 授業研究会 県教委要請訪問

- スーパーバイザー鹿嶋真弓先生を招聘
- テーマ「意見を出し合い、尊重し合う」
- 授業者：山根雄介教諭(2年生理科)
- 5限 研究授業
学習指導案に、支援が必要な生徒への具体的支援を入れる
【hyper - QUの結果をもとにした生徒への配慮】
- 研究協議 グループ協議(30分)
- スーパーバイザー鹿嶋先生の講義(80分)

<hyper - QUの実施>

- ・hyper - QUは11月8日に実施
- ・数字を転載し、ネガティブチェック
- ・11/24、25に「アセスメント・対応策シート」を記入し具体策を検討

○第3回 11月28日(月) 第2回hyper - QUの結果を利用して

- スーパーバイザー鹿嶋真弓先生を招聘
- ・11月28日：高知大学 鹿嶋真弓准教授の指導
- 1限 全クラス授業を鹿嶋先生が参観
- 2限～5限 hyper - QUを活用した学級経営について担任との懇談
- 研究協議 スーパーバイザー鹿嶋先生の講義(80分)

○スーパーバイザーによる指導助言

(1) hyper - QUの活用

- 「現在地」の確認をし、「目標(ゴール)」を設定する。
目標(ゴール)：「〇〇さんって、～なところがあるよなあ」という言葉が出る。
- アプローチ
 - ①個への働きかけをし、緊張感をやわらげる。
 - ②他者に興味を持たせる働きかけをする。
 - ③お互いに「すごい」と思える関係づくりをする。
 - ④「なるほどなあ」「こうやればいいんだあ」「やってみようかあ」発言が出るようにする。
- 「普通のすごさ」を共有していくと、みんながきちんとしていく「スタンダード」になる。
 - ・休憩時間に教師が立ち位置を変え、会話や接し方を工夫すると、「満足群」へ移動した。

(2) 授業の構成

- 「自主的」と「主体的」の違い
 - ・「自主的」：言われたり、指示されたりする前に動くこと。
 - ・「主体的」：やるべき事をやるのが当たり前で、工夫や創造が加わる。「自主的」よりレベルが高くなる。
- 「考えぬく力」をつける
 - ・考えを促進するような「ヒント」を出すことが大切。
 - ・魚を与えるのではなく、魚をどのようにしたら採れるのかを考えさせる。
 - ・アクティブ・ラーニングは、人間関係づくりがうまくできていないと困難。
- 「学びのリレー」
 - ・わからないことの説明から始める。
 - ・代表発表者は、途中までしかできていない生徒にさせ、わかる生徒につなげていく。
- 教師の働きかけ
 - ・わからなくて困っている生徒には、「どこまでわかる？」という問いをしてやることで、学んでいくきっかけをつくる。

- ・教師がしゃべっている時間は、生徒の思考が止まるので、課題を明確に示す。

(3) 学級担任との懇談

- 6月、11月の全体研究会では、hyper-QUを活用した学級経営に関する鹿嶋先生との懇談を行った。

<懇談の流れ>

学級の様子、今後の具体策について担任からの説明



鹿嶋先生からの指導助言



今後の具体策の確認

今後の具体策

- 「自分の考え」→「班の考え」→「クラスの考え」とつながっていくような活動をする。その際に、「ひとりひとりの意見がみんなのものになったね」という言葉をかける。
- 褒める際には、行動面もだが、内面的なことも褒めるようにする。自分だけが知っている良いところを褒めると、見てくれているという安心感が持てる。
- 生徒同士で良いところを認め合う活動を多くする。
- 認められる（認める）機会を増やす。
- 「満足群」にはいるけれど、「被侵害」の得点が高い生徒には、個別の見取りをしていく。
 - 委員会や係を中心として学校生活に仕事と責任を持たせる。（そのために各委員会や係の仕事内容を正確に把握させる）
- 班よりも小さな集団（隣、前後など）を活発に利用する。
- 授業中はどのような発言にも間違いではなく肯定的に捉える。
- 行事などでは生徒のリーダーを中心に活動させる。
- リーダーや率先して動く生徒の困り感をしっかりと聞く。
 - （そのための解消法などを一緒に考える。伝えたいこと伝えなければならぬことはなるべく生徒から生徒へ。そのための環境支援を行う。）
- トラブルが起きた場合には本人同士の意見を聞く。周りの思いも伝える。（生徒同士での解決を促し、後を引きずらないために、切り替えを早くする）
- 1学期同様に委員会、係に積極的に仕事を与える。忘れてたりしても最後までやらせる。そして仕事ぶりを褒める。生徒によって褒め方もかえる。
- 困難なことやできないことも信頼して任せる。
- 自分の居場所としてのクラスを作る。
 - （居場所：落ち着く、何でも言える、安心して生活できる）
- 決められたルールの中で自由な発言や行動を認め、朝学活と終学活（最初と最後）は笑顔で始まり笑顔で終われるようにする。
- 休憩時間は生徒と一緒に過ごす。
- 生徒と一緒に過ごす時間を増やし、たくさん話をし、日常の出来事の中から様々な話題を共有する。

③ミニ授業公開

- <目的> ・教員同士がつながりを持つ
・参観し、お互い研鑽し合う
・日々の実践の参考にしていく

*授業公開日の放課後に短時間の事後研をする

*下記のような用紙を前日、当日の授業公開までに配布する。

6月1日(水)2限 教科(3年3組 数学) 授業者(〇〇〇〇)
本時目標 ・展開や因数分解を活用して問題を解くことができる
学習内容・流れ 1 100マス計算 2 宿題答え合わせ 3 式の展開、因数分解を利用して計算 4 確認問題
感想等

- (2) 授業参観
空き時間に、先輩先生の授業を参観
- (3) 短学活参観
終学活で、生徒同士が関わって振り返る様子等を参観
- (4) 道徳参観
同学年の道徳を参観する

④縦割り活動

先輩後輩のつながりや、先輩としての自覚が持てる場面を設定

(「憧れの3年生」を目指して)

- (1) 縦割り練習
- ・3年生のリーダーが後輩へ振り付けを教える場面で、教員も分担して3年生を補助する。
 - ・練習終了後は、活動の様子を報告し合い、次の活動に生かしていく。
- (2) 気持ちの伝え合い
- ・先輩から後輩へメッセージを伝え、それに対して後輩から先輩へ感謝の気持ちを伝える。
 - ・先輩を目標とし、先輩を越えようとする気持ちを育成する。



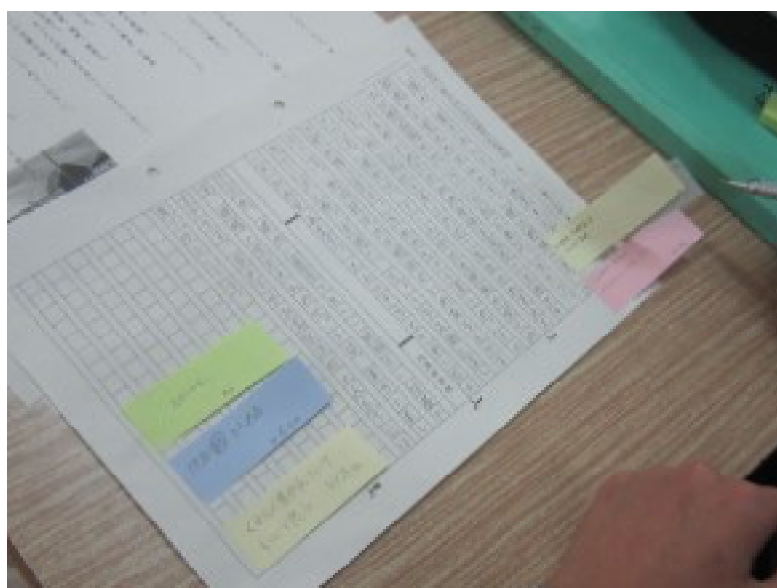
5 研究のまとめ

○安心して学び合える仲間○

3年生は、1年生の時から「グループ学習」を取り入れた授業を展開しており、お互いの意見を交わすことには慣れてきている。一人では理解しにくい問題も、3～4人のグループでの活動を入れると、理解できることが増えてきたという感想もあった。小集団を効果的に活用したことにより、質問しやすい雰囲気ができ、教え合いが充実したと考えられる。また、協調学習を引き起こす仕掛けとしての「知識構成型ジグソー法」を取り入れた授業も展開してみた。生徒ひとりひとりが主役になる場面があり、喜びと同時に責任を感じながらグループ活動に取り組んでいた。つまり、主体的な学びが自己肯定感につながり、学習意欲の向上にもつながっているように思えた。したがって、話し合いの中で「沈黙の時間」があるグループは、生徒達の思考が深まっている最中であり、思考していない状態ではないということである。教師側が、生徒を信じて待つ姿勢が必要であると思われる。



2年生では、1年生のときから、一人が考えた意見文や紹介文に対して、班員が助言や指導や反論などを付け加えていくような授業を展開してきた。できあがった作品を通して意見交流をすることは数多くあるが、作品を作り上げる途中の段階で、交流・互助しながら授業を進めていくことに力点が置かれている。また、聞き手に対して、わかりやすいプレゼン法などを学習した。このような協調学習では、知識の習得と活用の両輪を同時にまわしていくことになる。したがって、教師側は、「説明する場面」「聞き取る場面」が保障される授業を求めている。なくてはならない。



○わかりやすい授業○

1年生では、立体や平面図形などをイメージしやすいように映像や具体物を用いた授業を展開した。平面を回転させてできあがる「回転体」については、立体名は理解できるが、「見取図」に書くことが困難な生徒が多い。立体をイメージする力には個々の力の差が大きく、そのために、映像等を用いて授業を進めた。動点の軌跡が残ることで、理解度が大きく高まった。理解できた生徒は、悩んでいる生徒へ関わっていく姿があり、教え合いの形ができつつある。



○成果○

①数学診断テスト（3年生の入学時からの推移）

＜県診断テスト＞4月実施（1学期）

	平成26年度 1年生	平成27年度 2年生	平成28年度 3年生
県平均	72.7	58.9	57.1
中部平均	72.9	64.0	60.8
本校平均	71.2	64.7	65.2

＜中部診断テスト＞12月～1月実施（3学期）

	平成26年度 1年生	平成27年度 2年生	平成28年度 3年生
中部平均	64.9	61.8	65.0
本校平均	64.8	62.6	70.7

グループ学習を取り入れ、教え合いの場面を増やした結果、1年生では平均点に届かなかったが、2年生で平均点をやや上回り、3年生では平均点を大きく超えるくらいまでの力が付いた。教え合いが充実し、授業中にわからないことが解決できた成果でもある。

②hyper-QUの結果

- ・プロットの分布の「学習生活満足群」の割合が増え、「非承認群」「傷害行為認知群」「不満足群」の割合が減った。全体的に右上に分布しており、ルールづくりが徹底できて、いじめが起きにくい環境になってきている。

- ・学校生活意欲総合点及びプロフィールにおいて、学年が上がるにつれて、「1」段階の生徒が減り、「4」「5」段階の生徒が増え、全国平均を上回るようになってきた。2, 3年生では、かなり高い意欲を示していた。

- ・支援レベルの比較では、生活面の「二次支援レベル」（一斉指導に参加させるにはさりげない配慮が必要）、「三次支援レベル」（一斉指導に参加させるには、個別の特別な支援が必要、または、一斉指導と平行して行う、その子独自のプログラムが必要）の生徒の割合が減り、「一次支援レベル」（担任が行っている一斉指導に自ら参加できる）の生徒の割合が増えてきた。

○課題○

どの学年も生活の中での「人間関係づくり」は、順調に進んでクラスに馴染んできており、3年生のように3年間かけてできあがった人間関係のなかでは生活面、学習面両方とも「一次支援レベル」の割合が全国平均よりもかなり高い結果が出ていた。しかしながら、1, 2年生においては、「一次支援レベル」の割合が全国平均を下回っている状況にあった。今後の取り組みとして、年度当初のルールの徹底をはじめとした「人間関係づくり」をさらに発展させ、共通実践していきたい。そして、授業では、「二次支援レベル」「三次支援レベル」の生徒にしっかり向き合い、個に応じた支援や評価を工夫して、誰もが「できた」「わかった」という達成感を感じることでできる授業づくりに学校体制で取り組みたい。

6 おわりに

本年度、スーパーバイザーの鹿嶋准教授に指導していただき、学級の中での個を大切にしている取り組みについて、全職員が同じ方向性で取り組むことができた。特に、学級担任との懇談においては、支援が必要な生徒や学級全体への働きかけに対する具体的なアドバイス等をいただき、教育課題の解決につながっていったことが大きな成果でもあった。

一日のうちの大半を過ごす学校において、人との関わりを持ちながら生活していかななくてはならない。生徒と生徒、生徒と教師の間の対話やさりげない支援、意図的な支援などの重要性、そして、まずは、生徒と生徒との人間関係の構築が大切であり、そのことが、友人との関係、学級との関係や授業へも良い影響を与えていることが確認できた。

教師と生徒との人間関係の構築とは、ただ単に、生徒と仲良くなるということではなく、生徒達の成長を信じ、成長のために全職員が協働して教育実践していく中での関係性の構築と考える。本校の生徒は、教師のそのような取り組みや努力を受け止め、期待に応えようとする素直さを持っている。今後、「人間関係づくりの推進」「授業の中での効果的な支援のあり方」「誰もが達成感を味わえる授業の展開」などをさらに研究していきたい。